

柔らかな心と体 —想像力と創造—

齊藤まゆみ 体育専門学群
人間総合科学研究科体育科学系講師
(さいとう まゆみ／特殊体育学)

はじめに

ワイヤレスマイクを付けて動き回り、突然指名する。話しながらやたらと手が動いている、そして時折関西ことばが入る（受講生のコメントより）らしい。これが私の「特殊体育学」の講義風景です。以前、私の講義風景をビデオ撮影してくれたことがありました。それを見ての自己分析ですが、動き回るのは大講義室で、少しでも学生の顔を見て話したいから、手が動くのは、「聴覚障害の学生にもわかりやすいように」と講義で使ってみた手話が心地よいリズムとなり自然に動いてしまう、突然入る関西ことばは、体験談を語る場面が多いようです。学生の座る位置も大体決まっています。向かって右側前方に科目等履修生、中央には〇〇部の学生が多く、入り口付近には・・・、これは私が学生の頃から変わっていない光景です。そのせいか大講義室でも大体の学生の顔がわかります。最近では名前を覚えるのが遅くなってきましたが。

アダプテッド・スポーツとは？

体育専門学群の専門基礎科目に位置づけられるこの授業は、保健体育の教員免許取得を希望する科目等履修生や体育以外の学群、学類の受講生も多いのが特徴です。

筑波大学体育専門学群には、毎年約240名の学生が入学します。彼らが最初に「アダプテッド・スポーツ」ということばに出会うのは、スポーツ科学入門1という講義場面です。その後、講義、演習、実技、指導法、教職科目等でアダプテッド・スポーツをさまざまな角度から「見る・知る・実践する」ことになります。特殊体育学の受講生の多くが教員（免許の取得）やスポーツの指導者を目指していることから、教職科目も併せて履修する割合が高いことも特徴です。教育の現場は、特別支援教育としてインクルージョンへ動き出しています。体育の専門家として私たちができることは？将来指導者を目指す学生にはアダプテッド・スポーツの理解が必要不可欠であると考えています。

「想像・工夫・創造」これが、私の授業のキーワードです。座学で得た知識を、具体的なものにしていくために、過去の自分を振り返ることと新しい体験活動をするを課題としています。授業の最初に「障がいのある人とスポーツで知っていること」を問かけると2/5がよく知らない、1/5がパラリンピック、1/5が漫画やテレビ、1/5が交流体験などを回答します。

特殊体育学では、障がいのある人と体育・スポーツについて「人」を中心に学びます。どのような障害があっても、その人に適応させた体育・スポーツ活動（アダプテッド・スポーツ）があります。既存のスポーツに人があわせるのではなく、人にスポーツをあわせるための柔軟な発想が必要です。

ふりかえり

次に「自分が経験した体育やスポーツ」を振り返らせます。そこで多くの学生は、自分の身近なところで障がいのある人が存在していたということに気がきます。学齢期の体育授業・活動に目を向けると、受講生の40%は、障がいのある人についてよく知らない、見たこともなかったという現状がありました。しかし受講生の60%はきょうだいや身近な存在として、同じ学校の別のクラスで、学校行事や運動会、近隣の養

護学校との交流学习などにおいて障がいのある児童・生徒と何らかの交流経験があったと回答しています。しかし、振り返りが必要ならば、身近なこととして捉え、考えることもないのが現状です。

講義室からフィールドへ

体育の専門家として、座学で学んだことを具体的なものにしていける力を身につけて欲しいと考えています。そこで、全ての受講生を対象に、“障がいのある人とのスポーツ交流”を課題としています。これは、その人のできることに目を向け、どうすればできるのかという工夫をこらし、できるものを創造・実践していくというアダプテッド・スポーツの考え方に基づいています。写真は、「つくりんピック」の一コマです。

このイベントは、大学院体育研究科で特殊体育論実習を履修している学生が企画・運営をし、体育専門学群で特殊体育学を履修している学生も参加できるスポーツイベントです。地域の子どもたち、障がいのある子どもたちが集まります。学生と一緒に遊ぶお兄さん、お姉さんとしてじっくりと子どもたちと向き合い、体を動かし、汗を流し、笑います。頑として動かない子どもに手を焼きながらも一生懸命動き掛ける学生、会場内外を走り回る子どもを一緒に追



つくりんピック06：遊びの広場



すべて手作り！子どもにあわせて難易度がかわる



みんなでバレーボールをしていたら・・・

いかける学生、ことばだけでコミュニケーションがとれず悩む学生、みんなが大いに盛り上げアダプテッド・スポーツを楽しむイベントです。交流体験をすると「一緒に楽しむ」、「自分たちと同じである」ということに気がきます。

おわりに

日本では、総人口の約20人に1人は障がいのある人、身近な存在であるにも関わらず、社会の理解は十分であるとは言えません。有形無形のバリアが存在しています。いちばんお金はかからないけれど、いちばんやっかいな「心のバリア」を取り除くために、大学で蒔いた「アダプテッド・スポーツ」という種は、社会で芽を出してくれると信じています。